Catwalk

[特集]

まつもと市民芸術館20周年、
芸術監督団いよいよ始動！

まつもと市民芸術館
Matsumoto Performing Arts Centre

vol.
03
2024
Spring

ひらいていく劇場

開く	市民にとってよりオープンな劇場へ
拓く	未知な領域、新しい観客を開拓
易く	難しいことをやさしく
啓く	啓発、啓蒙
披く	松本から作品を発信

まつもと市民芸術館はおかげさまで、2024年に開館20周年を迎えます。昨年6月の新体制発表以来、芸術監督団の３人と打ち合わせを重ね、新年度のラインナップは古典、ダンス、音楽などこれまで以上にバラエティに富んだ演目が揃いました。これら以外にも多彩な事業や新しいチャレンジをしてまいります。さまざまな方向にさらに“ひらいていく”芸術館、それをリードしていく芸術監督団の活動にどうぞご期待ください。

右／20周年記念ロゴ。2024年４月、新たに就任する芸術監督団が“３人”であること、松本市に新しく“ひらいていく”劇場をイメージして“３つのひろがる円”をモチーフにしている。
デザイン：清水貴栄（2023年度松本市文化芸術奨励賞受賞）

⬅ NEXT PAGE

いよいよ、３人体制のまつもと市民芸術館芸術監督団が船出する！　去る１月30日に2024年度のラインアップ発表会が開催された。芸術監督団団長・芸術監督［演劇部門］木ノ下裕一、芸術監督［舞踊部門］倉田翠、ゼネラルアートアドバイザー・石丸幹二が出席し、“顔見世”として多くの方に見ていただける企画と、自身の表現を深められる企画について思いを語った。

Photo : Takeshi Yamada

2024 LINEUP

木ノ下裕一 企画

〈10月／主ホール〉

木ノ下歌舞伎『三人吉三廓初買（さんにんきちさくるわのはつがい）』

原作：河竹黙阿弥
監修・補綴：木ノ下裕一
演出：杉原邦生
企画制作：東京芸術劇場・
木ノ下歌舞伎／一般社団法人樹来舎

杉原邦生
photo : Shinji Hosono

歌舞伎を深い読み込みと大胆な発想で現代に甦らせる、木ノ下率いる木ノ下歌舞伎の代表作の一つで、５時間超えの大作。歌舞伎作者・河竹黙阿弥が『三人吉三廓初買』を著した幕末は、安政の大地震やコレラの流行に見舞われた動乱期であり、我々がここ数年に体験した世界の混乱をほうふつとさせる。抗えない世の趨勢に飲み込まれながら、賢明に生き抜く若者たちを描く本作を通して、「今」改めて世に問いかける。

「2014年、15年に上演した作品をブラッシュアップ、装いも新たにお届けします。現行の歌舞伎ではカットされる、廓を舞台とした文里と遊女・一重の物語を含め完全復活。江戸時代の初演以来一度も上演されていない「地獄の場」を、原作に忠実でありながら大胆に再現し、黙阿弥の紡ぐ物語の魅力を存分に生かした作品を目指します」

〈12月上旬／小ホール〉

古典企画『バラエティ寄席（仮）』

出演者調整中

落語、浪曲、活弁と第一線で活躍する芸能家を招いたオリジナルなプログラム。実演のみならず、バラエティに富んだ出演者と木ノ下とのトークも交え、それぞれの芸を深掘り。第一弾のテーマは「語りと音楽」。

倉田 翠 企画

〈6月8・9日／特設会場〉

akakilike『希望の家』

演出：倉田翠
出演：倉田翠、桑折現、白神ももこ、前田耕平、吉田凪詐
企画制作：akakilike、まつもと市民芸術館

徹底的にフィクションでありながら、常に現実の自分自身と社会の間にある問題とつながっている倉田作品。新作のテーマは「信仰」。人には信じるものがさまざまにある。「信じる」ということの反対には常に「信じられない」ということがある。人は何を拠り所として生きていくのかを「結婚」を題材に描く。［16ページBに公演情報あり］

「私は京都で、スタッフのみが集まり、作品ごとに変わる出演者とフラットな関係で創作するakakilikeという団体を主宰しています。その新作を松本にも滞在しながら制作します。私はダンス作品をつくっていますが、まったく違う文脈を持つ人たちとやりとりし、刺激を受けることで「こういう作品をつくりたい」という私だけのイメージがどんどん変容し、飛躍していくことこそが一番の面白さだと思っています。今回も拠点も世代も違う俳優、ダンサー、現代アートのアーティストの出演者５名と、それぞれの持ち味、存在の仕方を取り入れながら作品を上げていきます」

左から倉田翠、桑折現、白神ももこ、前田耕平、吉田凪詐

〈日程未定〉

古典企画『耳で愉しむ古典文学（仮）』

出演者調整中

「竹取物語」「枕草子」「徒然草」「平家物語」などの古典文学を、原文と現代語訳（木ノ下が新たに訳し下ろし！）の朗読、木ノ下の軽妙な解説によって味わっていただく、鑑賞×学習のハイブリット企画。

「耳で楽しむ古典文学と題してさまざまな日本の古典の文学作品を朗読で聞く企画。古典朗読のエキスパートの方をお招きし、心で感じて面白い、頭で理解してまた面白いものを目指します」

松本少年刑務所

〈通年〉

『ワークショップ』

松本少年刑務所と連携し、刑務所内で定期的にワークショップを実施。薬物依存回復施設京都ダルクや東京のビジネスパーソンと作品づくりをしてきた倉田が、受刑者との対話やさまざまなワークを通し、「今ここに私たちが存在することの意味」を探る。

「私は芸術監督として市民の皆さんとの作品づくり、ワークショップも期待されていると思います。私自身が興味が持てること、松本でやるのに意味があることを考えたとき、日本で唯一、中学校の分校がある少年刑務所の存在を知りました。かつて薬物依存症の人たちと作品をつくったときに“罰だけでは薬は止まらない、教育が必要だ”と言われたこととつながったのです。ダメもとで所長さんに相談したところ、“刑務所もひらいていかなければ”と前向きに検討してくださり、ワークショップが実現することに。ワークショップで終わるか、作品化できるかはわかりませんが、長期的に実施していきます。私自身、非常に期待しています」

〈8月下旬／屋外〉

『身体と音楽』（仮題）

小菅紘史×中川裕貴『山月記』／小暮香帆×大友良英 セッション

「ダンスの見方」をさまざまな方向から捉えるべく、ダンス、音楽、演劇などジャンルを超え、また劇場という場所に捉われない、垣根のないパフォーマンスが夏の松本の夜を彩る。第１弾は３組が登場。俳優・小菅紘史とチェロ奏者・中川裕貴のユニットが『山月記』を上演。また、国内外で自身の作品を発表しながら舞台、ライブ、メディアなど境界を越えて動きの美学を展開する小暮香帆と、ノイズや即興の現場でも活躍する音楽家・大友良英による即興セッションをお届け。松本在住のパフォーマーも参加予定だ。

「私自身がダンスをどう見てきたか、理解してきたかを紹介することで、ささやかにダンスと出会っていただけたらと思い、いくつかの小さな作品を上演するシリーズを考えています。『山月記』は演劇ですが、物語に即した身体を見せるクラシックバレエを見ているような気持ちになった作品です。小暮さんは非常に身体能力が高く、体から物語や景色、イメージが見えてくる存在。ダンスはいろいろな見方ができますし、音楽があることで近づきやすくなると思います。気軽に楽しんでください」

左から小菅紘史、中川裕貴、小暮香帆、大友良英

石丸幹二 企画

〈4月21日／主ホール〉

～0歳からお年寄りまで、みんなのコンサート～

『はじめまして！』

出演：石丸幹二、木ノ下裕一、倉田翠、クリヤ・マコト（ピアノ）、塚越慎子（マリンバ）、林周雅（ヴァイオリン）　ほか
企画制作：まつもと市民芸術館、プロマックス

芸術監督団３人がそろってのご挨拶コンサート。初めてのピアノ、初めてのマリンバ、初めてのヴァイオリン、初めまして赤ちゃん、初めまして音楽、初めまして松本、初めまして芸術……みんなの《はじめて》であふれた楽しい内容に。［16ページAに公演情報あり］

「0歳から高齢者の方、障がいを持つ方、どなたでも参加できるコンサートです。特に小さなお子さんには初めてのコンサート体験かもしれません。一緒に歌ったり手足を動かしたり客席にいながらにして参加できる内容を考えています。我々３人も自己紹介を兼ねて司会者として舞台に立ちます。それぞれの個性も味わっていただきながら、楽しんでください」

左からクリヤ・マコト、塚越慎子 photo : Shingo Azumaya、林周雅

〈11月上旬／小ホール〉

『石丸幹二、デュオコンサート with クリヤ・マコト』

出演：石丸幹二、クリヤ・マコト　企画制作：プロマックス

石丸幹二とワールドワイドな活動を展開しているジャズ・ピアニストのクリヤ・マコトによる、大人の音楽を堪能する贅沢なコンサート。

「小さな空間だからこそ味わえる、温もりが伝わるようなライブをお届けします。クリヤさんの、ジャズをベースに繰り広げられる演奏と私の歌。深くたっぷり、秋のひとときをお楽しみください」

ゼネラルアート
アドバイザー

石丸幹二

芸術監督団就任への想いを語っていただくインタビュー、ラストは俳優・歌手で、テレビでは司会者としても活躍する石丸幹二参与。まつもと市民芸術館では『空中キャバレー』『兵士の物語』のクリエイションで松本市に長期滞在したこともある。次期ゼネラルアートアドバイザーとしての想いを語っていただいた。

文化都市・松本はいろいろな挑戦をしてきているのにまだまだ何かできそうだと思わせてくれる街

——芸術監督団へのオファーがあったときはどのように思われたのでしょうか。

まつもと市民芸術館は串田和美さんが長らく芸術監督を、夏の音楽祭では小澤征爾さんが芸術総監督をされていました。私にとってお二人の存在感は大きく、お声がけいただいたときにはまず非常に驚きました。確かに魅力的な仕事ですが、一人の俳優として活動してきただけの私に、劇場での演目をプログラム化していくのは難しいと思いましたね。何度か話し合いを持ち、幸いなことに3人体制の芸術監督団とのことでしたから、専門分野を統括して市民の皆さんに伝えていくのも一つの仕事だと思えたときに、私にできることが透けて見えてきました。

——木ノ下裕一さん、倉田翠さんの印象はいかがですか？

お二人とも面白いですよ。アイデアを温めて温めてというのではなく、ポンポン飛び出してくる。それに触発されて、私一人では考えつかないようなことが思いがけず出てくるようになりましたね。また、お二人からは、市民の方々に参加していただいて一緒に何かをつくり上げる、そのためにはこちらからどんどん働きかけないと始まらない、という意識を植えつけられました。今ではいろいろなアイデアがふつふつと湧いてきています。

——イメージされたのはどんなことですか？

「ひらいていく」のコンセプトに対して、（私が専門としている）演劇・音楽で何ができるか考えたときに、劇場に来づらい、足を運ぶことを躊躇されている方々に、「飛び込んでおいでよ」という場を設けたいと思いました。赤ちゃんや子育て世代の方々、高齢の方々、障がいのある方々などなどたでもいらしてください、私たちが表現する世界に触れて、心を羽ばたかせてくださいということです。その手始めが、『はじめまして！』のコンサート。泣いてもいい、走り回ってもいい、騒いでもいい。まさに、私たちの所信表明になるでしょう。劇場はかしこまって聴く・観るというルールを学ぶ場でもあるけれど、面白かったら面白いと身体全体で表現していい、「こんにちは」と気軽に顔を出していいんだよというメッセージになればと思います。

——前号で浅間温泉の菊之湯さんを訪問した際に、観光業の方々ともっとつながりたいとおっしゃっていたのが興味深かったです。

女将さんとお話したときに、路面電車が走っていたころは中心市街地と浅間温泉の交流が頻繁だったとおっしゃっていました。以前あったものがなくなる理由は多々あるでしょうが、人の心や記憶には残っているはず。ノックしたらいつでも開く可能性がある。それなら新しい形で双方の活発な交流を復活させたい、そんな思いが湧きました。浅間温泉をはじめ松本には多くの温泉があります。これは観光関係の方々とのタッグが必要ですが、温泉地のスタンプラリーができるのなら、芸術館の音楽や演劇をくっつけるような企画ができないかなと思ったりもしています。

——「ひらいていく」をコンセプトに、芸術監督それぞれが新しい客層にノックしようとしているのは楽しみですね。

ありがとうございます。松本市はとにかく広いですよね。市町村合併（2005、2010年）によって誕生した、〝新〟松本市のエリアにもスポットを当てていきたいですね。私たちは松本の文化行政の仕事をさせていただくのに、芸術館がある中心市街地ばかりではなく、芸術館を飛び出し自分たちの足で訪ねていきたい。たとえば小さなライブを通して、それぞれの地域の魅力を掘り起こせるんじゃないかと思いますし、それをきっかけに地域の皆さんとも出会い、もっと知り、つながりたいと思っています。

——石丸さんにとって松本はどんな街になりそうですか。

長い歴史の中で市民の皆さんが、意識高く文化や芸術を育んでこられました。私たち芸術監督団のメンバーは、そんな日本有数の文化都市に飛び込んできました。時折り市民の方から「私たちがびっくりするようなことを立ち上げて」という声をいただきます。文化芸術に強い思いを持った方々がいらっしゃることは私たちの支えになりますし、もっと何かできそうだとワクワクさせてもくれます。

私たちの仕事は、これまでの串田さんのカラーをどう受け継ぎ、どう新たな領域を拓き、バトンを次につなげていくかということ。その意識を胸に、3人で協力し合って、新しい芸術館の姿をお見せできればと思います。

INTERVIEW ①

東京音楽大学音楽学部器楽科にてサックス、東京藝術大学音楽学部で声楽を学ぶ。東京藝大在学中の1990年、劇団四季にてデビューし、看板俳優として活躍（2007年退団）。その後は、『ジキル＆ハイド』『蜘蛛女のキス』『ハリー・ポッターと呪いの子』など多数の舞台作品に主演するほか、映像では、ドラマや映画などに多数出演。またテレビでは「題名のない音楽会」「健康カプセル！ ゲンキの時間」の司会を務めている。音楽では、アルバムのリリースのほか、オーケストラコンサート、ジャズクラブライブ、ディナーショーなど多彩に活動している。

Photo : Naoto Yamaguchi

ものづくりにどっぷりハマれる松本で新しい風を吹かせたい

来る5月上演の、舞台『女40歳 肉屋のムスメ』。劇団「ONEOR8」の田村孝裕が2014年に書き下ろした戯曲で、俳優として活躍している福士誠治が演出を担当。初めて松本で作品を手がける福士に、作品の魅力や期待、さらには演出を続けている思いを聞いた。また、主人公・ひなのを演じる小林きな子、その母・清子役の長野里美の意気込みもお届けする。

――本作を選んだ理由を教えてください。

田村さんの脚本が好きで読ませていただいていましたが、その中で人間模様が表現できるものをと考えて選びました。この作品は人間の内側と外側の二面性や、抱えているものが描かれていて、一人ひとりのキャラクターや、年代や性別による異なる悩みなど、観に来てくださった方がそれぞれに感情移入してご覧いただけると面白いと思います。

――脚本を初めて読んだ時の印象をお聞かせください。

ページをめくるのが楽しくなる小説のような読みやすさがありました。主人公が40歳までどう生きてきたのか、その成長具合や感情の揺れや選択などとにかく面白い。周囲の人も含めて、善意だと思っていたものが実は苦しめていたり、悪いなと思っていたことが全然気にされていなかったり。身近なところにあるものが溢れています。

――演出する上でポイントと感じていることは何ですか？

舞台に立っている人たちに嘘がないこと。人が持つ相手に与えるエネルギーを稽古しながらつくっていきますが、どういう人物像なのか話し合いながら深めていければ、それが真実の言葉になっていくと思います。

――キャストの皆様に期待することをお聞かせください。

きな子さんは感情の揺れと、内に秘めたエネルギーをどれだけ隠せるか、長野さんは内に秘めているものをどれだけ隠さないか、その対比が楽しみです。松本でお芝居されているシアターランポンの3人には、彼らならではのグルーヴ感や勢いをいただきたいなと。事務所の後輩でもある星野勇太にはとにかく芝居を楽しんでほしい。

――どんな方に観てもらいたいですか？

まずは松本の40歳の方全員に（笑）。悩むところ共感するところもあるだろうなと思います。僕も40歳ですが結構面白い節目。いろいろ抱えていたり、将来が現実的な見え方をしたり、夢をあきらめたこともあるだろうし。もちろん、どんな方にも観てほしいです。

――演じるだけでなく、演出をするようになったきっかけは？

10代のころに俳優仲間でユニットを組み、舞台をつくりました。その経験が楽しくて自分もやってみたいと思ったのが最初のきっかけですね。そのときに楽しかった思いが体の中に溢れたので、今も続けられています。

――演出するのと演じるのでは、楽しさは違いますか？

違いますね。演出してみて俳優さんって本当に素晴らしいと実感できた。稽古場でみんなでつくったプレゼントを、俳優さんが最後にお客様に手渡しすることに改めてリスペクトできました。

――演出家として大切にしていることはありますか。

観ている方の心が動いてほしいと思いながらつくっています。僕だけでは超えられないものが出てきたときには、自分が俳優をやっているときのアイディアを用いたり。作品をつくる仲間が風通し良くクリエイティブにチャレンジできる空間づくりを大事にしています。

――松本の印象や楽しみにしていることをお聞かせください。

芸術館では何度かお芝居させていただいていますが、綺麗でおしゃれな劇場にテンションが上がりました（笑）。松本の皆さんは舞台が好きで、劇場に足を運ぶのを楽しみにされている印象が強いですね。東京以外で演出させていただくのは初めてです。ものづくりにどっぷりハマれる環境がすでにできているので、この舞台で新しい風を吹かせたいと思います。

小林きな子・中／皆さんの町にもあるような小さなお肉屋さんでの出来事をこっそり何か盗み見するような、そんな楽しい気持ちになってもらえたらなと思います。家族のあり方であったり、自分が家族とどう向き合うかということも考えさせられるような作品だなと思っているので、それも皆様に伝われば嬉しいです。稽古から松本でできることが楽しみです。きっと土地が体になじんでくるんじゃないかと。劇場でお待ちしています。

長野里美・右／楽しいながらも、ちょっと皮肉の効いたこの作品を皆様に届けたいと思います。クスクス笑いがあったり、爆笑があったり、最後には温かい気持ちになって帰っていただけたらと思っています。かわいらしく憎ったらしい清子役を演じさせていただきます。どうぞ皆さん楽しみにしていてください。ぐんぐん拡がる松本の文化的威力に私も目を離さないでいようと思います！

福士誠治

2002年に「ロング・ラブレター 漂流教室」でドラマデビュー。06年のNHK連続テレビ小説「純情きらり」でヒロインの夫役を演じ注目を集める。近年では大河ドラマ「青天を衝け」ドラマ「警視庁アウトサイダー」や舞台「インヘリタンスー継承ー」など俳優として舞台、ドラマ、映画など様々なジャンルで活躍を続け、近年では自身の俳優としての経験を活かし、舞台の演出も手掛け高い評価を受けている。

Text & photo : Mika Iwamura

中高生演劇創作
ワークショップ
「新しい演劇のつくり方
inまつもと」

山本卓卓（すぐる）
インタビュー

2023年12月からはじまった計8回の中高生向け演劇ワークショップ「新しい演劇のつくり方」。講師は演劇集団「範宙遊泳」代表で劇作家・演出家の山本卓卓。メディアミックス的な演出と、観る者の倫理観に揺さぶりをかける脚本で最も注目を集める劇作家・演出家のひとりだ。すでに6回をともにしてきた10名の若者たちとのワークショップの様子を中心にお話を聞いた。

——演劇をゼロから教えるワークショップはとても珍しいですね。

このワークショップ自体は、東京・渋谷にあるクリエイションのための学びの場「GAKU」からの依頼で、2021年に初めて実現しました。今回はその松本バージョンです。

「新しい」が「演劇」にも「つくり方」にもかかっているところがポイント。つくり方の何が新しいのかというと、稽古場の中では加害と暴力は許さないという前提で、「ダメ」を徹底的に排除していくことです。否定には何の価値もないからです。それはとても骨の折れる作業で、話し合いが必要だったり効率的じゃない時間が生まれたりすることも含めて、僕の中での新しいつくり方です。

同意を取っていく、お互いにやりたいことをやっていくというのは、ここが安全な空間であるということと同義です。それをみんなが認識した上でクリエイションするのが大事。一般的な演劇創作は演出家が持っているビジョンの通りに俳優が動いて逸脱してはいけないというヒエラルキーがあり、僕は演劇を始めたところからずっと憤りを感じてきました。そこからは明確に距離を取っていきたいし、作品や演出家のために俳優や制作スタッフが存在するのではなく、「あなたがいるから」演劇が成り立つ前提でつくりたいです。

——参加者を継続的にご覧になっていて、いかがですか？

参加者が応募するモチベーションを持つこと、情報が本人まで届いていることの二つのすごさを感じています。だから、「NO」と言いたくなかった。応募者が30名もいたら全員を受け入れることはかなり難しいですが、10名が12、13名に増える程度ならば必ず受け入れようと決めていました。

表現するのは恥ずかしくて怖いことで、「どう思われるんだろう」という不安をみんな持っています。これに関しては、自分を表現させてくれない社会の責任が本当に重い。ここでは、参加者同士や僕との関係が深まることで、自分のことを表に出してもいいんだと、参加者が少しずつ変化しているのを感じます。人によっては、今日の稽古でできたことがまたリセットされてしまうこともありますが、「大丈夫だよ。自分を表現したことがまず一番で、なかなかできることじゃないんだよ」ということを、参加者にはずっと繰り返し伝え続けています。

——参加者が書いた脚本を山本さんがほとんど手を入れないのが印象的でした。

ワークショップでは僕の我を通す意味はなく、総合演出として大枠やガイドラインを示すだけです。まずみんなにどんなことでも戯曲になりうることを体感してもらって、書く抵抗感を減らしていく。その上で、その戯曲を使って演出、演技して一通り味わってもらってから希望を聞きました。

——松本では、2019年に範宙遊泳「シリーズおとなもこども『フィッシャーマンとマーメイド』」が上演されています。

当時、僕は留学中で上演に立ち会えなかったんです。なので、今回のワークショップが初めての松本です。僕は山梨県の笛吹市出身で、「松本は都会だな」というのが第一印象です（笑）。城下町の風情とのバランスがよくて、何よりそばがおいしい。松本駅ホームの駅そばを食べるのがワークショップのアシスタントをしてくれている植田崇幸くん（俳優・ダンサー）とのルーティンになっています。ここのスタジオは、壁の一面が窓になっていて外にも出られるし、ロケーションが最高です。オープンスタジオも同じように大きな窓があって、〝上演欲〟をかきたてられますね。

——X（旧Twitter）で2024年夏以降は範宙遊泳での演出はやめて、俳優業や新作執筆に専念したいと発表していました。

以前から、作・演出の兼任はプレッシャーがかかりすぎることが気になっていました。兼任だと、演出する時のことを考えて劇作の筆が鈍ったり、創作上の解決したい問題を先送りしたりすることもできてしまいます。劇作に集中していると、普段見過ごすような違和感や欲望に意識的になれます。経験を積む中で一人ひとりの比重を軽くすることでクオリティが上がると確信が持てるようになったので、作と演出を切り離すことにしました。芸術家は無頼であるという考え方が僕は全然わからなくて、アーティストが特別な存在というわけでも、偉いわけでもない。〝仕事をしている人〟であり〝生活している人〟。そう認めるところから始めたいと思っています。

劇作家・演出家。演劇集団「範宙遊泳」代表。1987年山梨県生まれ。桜美林大学在学中に範宙遊泳を旗揚げし、さまざまな作品を世に問う。アジア諸国や北米で公演や国際共同制作、戯曲提供なども行っている。ACC2018グランティアーティストとして、2019年９月から半年間ニューヨーク留学。『幼女X』で「Bangkok Theatre Festival 2014」最優秀脚本賞と最優秀作品賞を受賞。『バナナの花は食べられる』で第66回岸田國士戯曲賞を受賞。公益財団法人セゾン文化財団フェロー。

INTERVIEW ③

Text : Kyoko Kurimoto　Photo : Yuki Yokosawa

台詞・詩・演出：加藤 直
作曲：信長貴富
指揮：城谷正博
出演：杉山由紀　天羽明恵　須藤慎吾
　　升島唯博　澤武紀行　山下浩司　大塚博章
　　三戸大久　岸浪愛学　福間章子　佐藤路子
合唱：まつもと市民オペラ合唱団
演奏：山と海猫オーケストラ

まつもと市民オペラ第８回公演
オペラ『山と海猫』

2023年版〈委嘱作品〉

まつもと市民オペラとしては初の委嘱作品。海にまつわる長野県の地名や伝説を題材に、山と海が混在する境界に生まれたムラという共同体の結び付きの物語を、天狗に拐われた少女・花月が語り継いでいく。あらゆるものがデジタル化されていく現代への問題提起が鋭い。さまざまな手法を駆使した信長貴富の音楽は、現実と幻とを行き来しながらイマジネーションあふれる世界へ観客を誘う。

山本卓卓 中高生演劇創作ワークショップ
「新しい演劇のつくり方 in まつもと」

今回の中高生向け演劇ワークショップは、12月10日から2024年３月24日までの計８回で、出演だけでなく脚本や演出、空間づくりなど制作プロセスを包括的に体験するというものです。「範宙遊泳」の群像劇『うまれてないからまだしねない』の世界観をベースとして、山本卓卓さんとともに新しいつくり方で新しい演劇をつくりあげ、最後は短編作品の試演会で発表します。10名の応募があり、演劇経験のない参加者のほうが多い顔ぶれになりました。２月25日（日）に開催された第６回「上演に向けての稽古」の様子をレポートします。

雪が降り続ける午後１時前、参加者がまつもと市民芸術館のスタジオ２に集まってきます。今日が誕生日の参加者を祝い、俳優・ダンサーの植田崇幸さん主導でボディワークがはじまります。「寒さをレベル１から10まで表現してみてください」。初めてならば戸惑う場面ですが、すでに５回の日程を積み重ねてきている参加者は驚くほどスムーズに動きに没頭していきます。「お金持ち」にテーマが切り替わると、「カラオケ行こうぜ！」「１億円配布しまーす」と、どんどん明るく背筋が伸びてきます。「時間」では各々違う時間の進み方の中で何かと戦う人、何かの生き物になる人、「OKグーグル、音楽をかけて」などいろんなアクションが生まれ、レベルが進むにつれ不思議と静かになっていくのでした。「表現の幅は無限にあって、その時々で選択を迫られるのが演劇の面白いところ。楽しみながらもっとチャレンジしてください」（植田さん）。

身体も場も温まったところで、山本さんにバトンタッチ。これまでの日程で希望に沿って劇作、演出、役者を決めてきました。この時点で６本の脚本が出ており、その読み合わせです。「戯曲は書いて終わりじゃない。隙あらば足してやる、隙あらば削ってやるという気持ちで取り組んでください」（山本さん）。

各グループに分かれて、演技に落とし込んでいきます。今回は俳優主導でまず演じてみて、演出家がフィードバックして練り上げていくかたちを取りました。

休憩をはさんで、各グループがみんなの前で演じる時間を設けます。「ヨウセイノイタズラ」「夢枕」「タイトル未定」「にいとちび」「水中都市東京」の順で演技がはじまると、スタジオに心地よい緊張感をはらんだ舞台の空気が流れだしました。見るほうも真剣な面持ちです。終わったところで車座になってフィードバックを伝え合います。ここでも参加者は発言をためらうことなく、感じたことをポジティブかつフラットに伝えます。山本さんからは「どのグループもいい感じで、それは俺が保証します。今日もがんばった！」と、力強い労いの言葉が掛けられました。

募集時に山本さんが寄せたメッセージには、「それ（注：群像劇）は主人公、脇役、などと区別することなく、登場人物のだれ一人が欠けても成立しない劇のあり方です。本来、世界とは、社会とはそうあるべきだと私は思っています」という一文がありましたが、ワークショップがすでにそのような場になっており、それを支える「ここは安全な場所」という感覚の共有が良いクリエイションを引き出している様子が実に印象的でした。

Text & Photo : Kyoko Kurimoto

キリッと清々しい空気の中、源智の井戸の湧き水に触れてから芸術館へ。舞台は妖しい色に照らされ、既に異世界に入り込んだような空間に迎えられ、客席の真ん中通路すぐ後ろの席で幕開けを待つ。

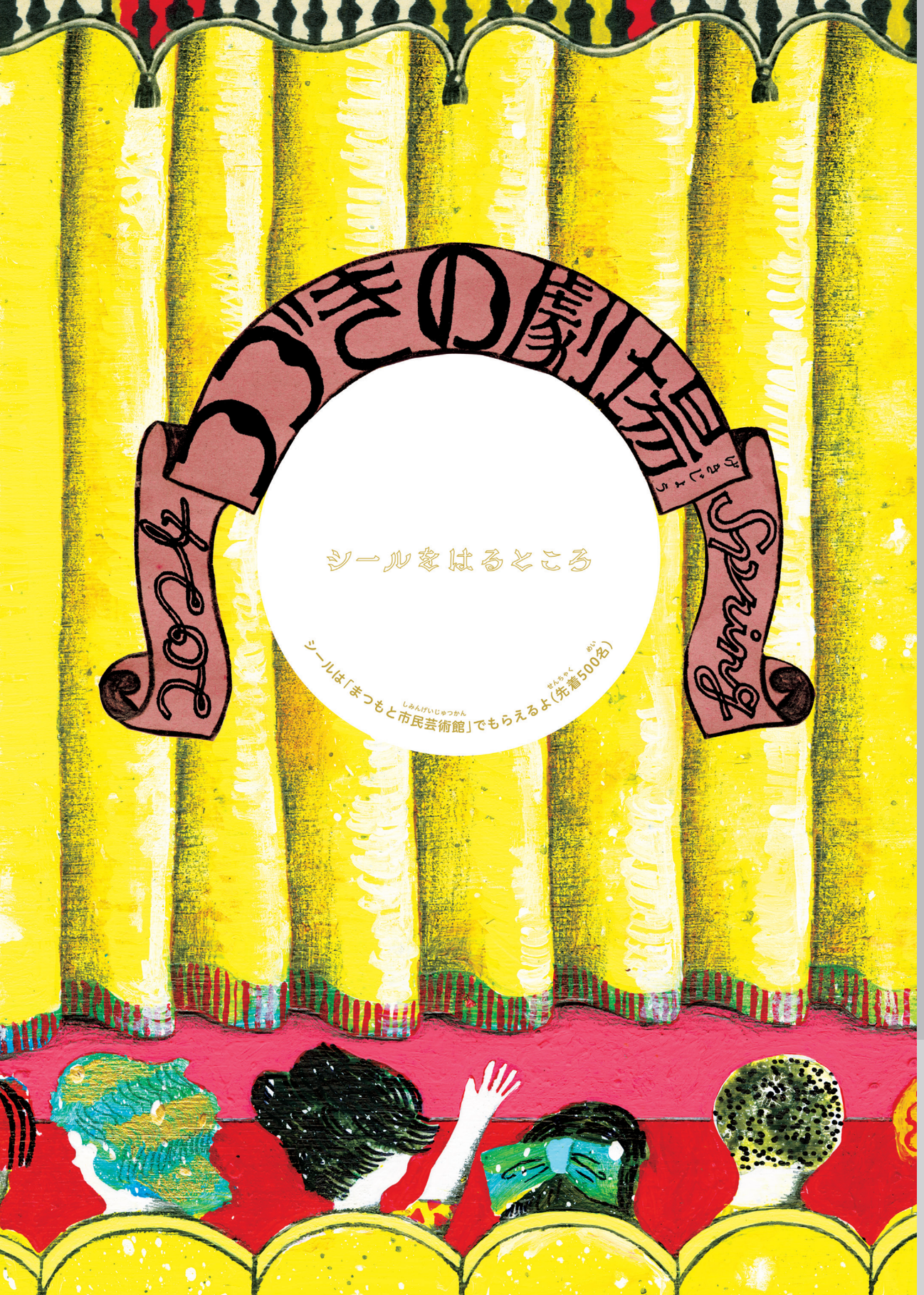
オペラはわらべうた風な合唱、人の声だけで始まった。そこへ楽器が一つまた一つ、音で空間に線を引くように、絡むように、邪魔したり悪戯するかのように立体的に刺激的に次々出現し、あっという間に音の波に飲み込まれる。パンフレットに掲載されていた、台本・詩・演出の加藤直による作曲家『信長貴富論』には、〝あの優しそうな表情に騙されてはいけない。実は破壊と創造の二面性を持つトリック・スターらしいのだから、ご用心。〟とあった。起きることを逃さないよう眼と耳を精一杯開いて追う。

充実の歌唱力で魅せた合唱団は、舞台の上段奥から現れ、まるで中空に浮いて、そこから世界を民衆の歌で動かしているかのよう。終盤で客席すぐ目の前にやってきて歌う場面も聴き応えあり印象的であった。

民話や伝説が基になる役と現代人の役が交錯しながら物語は進む。それぞれの個性に対し、古今東西の様々な要素が盛り込まれ超絶技巧必須な歌を豪華ソリスト陣の熱演で堪能。少女「花月」（杉山由紀）の愛らしさ、超越した存在「かえるで」（天羽明恵）の天から降り注ぐような声、悪役？だったのにだんだん応援したくなる現代人代表「山田」（須藤慎吾）の圧倒的説得力。面白かった「地図屋」4人（升島唯博／澤武紀行／山下浩司／大塚博章）のデジタル現代音楽的な四重唱、途中の登場は私の真横の扉から客席へ、なんだか物語に巻き込まれたような愉しさがあった。指揮・城谷正博が率いる山と海猫オーケストラが奏でる多彩な音の大海は圧巻であったし、合唱で折々に不気味に意味深に歌われた〝海猫の鳴き声〟が忘れられない。

旅を続けるだろう道々の民、松本を飛び出しどこかでまた出逢えることを心から楽しみにしている。

Text : Yuki Akasaka（合唱指導者／歌い手） Photo : Takeshi Yamada



公演情報はぬり絵の後にも掲載しています

4月20日発売

akakilike『希望の家』

6月8日(土) 14:00、9日(日) 14:00
特設会場

演出・構成：倉田翠
出演：倉田翠　桑折現　白神ももこ
前田耕平　吉田凪訴

料金：整理番号付自由席（税込）
一般 ¥3,500／U25 ¥1,000

※未就学児入場不可
※U25チケットは枚数限定・前売のみ。また当日年齢確認証提示。

4月6日発売

『La Mère 母』

6月15日(土) 14:00
主ホール

作：フロリアン・ゼレール
翻訳：齋藤敦子
演出：ラディスラス・ショラー
出演：若村麻由美　岡本圭人
伊勢佳世　岡本健一

料金：全席指定（税込）
一般 ¥7,000／U25 ¥4,500

※未就学児入場不可
※U25チケットは枚数限定、前売のみ。
また当日年齢確認証提示。

5月11日発売

第８回 信州・まつもと大歌舞伎

7月12日(金) ～7月15日(月・祝)
主ホール

演目：一、正札附根元草摺（しょうふだつきこんげんくさずり）
流星（りゅうせい）
二、福叶神恋噺（ふくかなうかみのこいばな）

出演：中村勘九郎　中村七之助　中村虎之介　中村鶴松
ほか

料金：全席指定（税込）
特等席 ¥13,500（お土産付き）
一等席 ¥12,500　二等席 ¥7,000
三等席 ¥5,000（25歳以下 ¥3,000）
四等席 ¥2,000（25歳以下 ¥1,000）

中村勘九郎　中村虎之介　中村鶴松　中村七之助

Information

SIDE A B

『Catwalk／ねこあるき』は、まつもと市民芸術館の新しい広報誌です。『Catwalk』は芸術館の情報、『ねこあるき』は街の情報を中心に紹介し、両側から読めるようになっています。またCatwalk（＝キャットウォーク）とは、劇場のステージや客席の上のスタッフしか歩くことのない細い回廊のことを言います。

『Catwalk／ねこあるき』Vol.3

2024年３月29日発行

発行　まつもと市民芸術館
〒390-0815
長野県松本市深志３丁目10番１号
Tel 0263-33-3800 Fax 0263-33-3830
E-mail mpac@mpac.jp
URL https://www.mpac.jp

編集　いまいこういち（『engawa』）
デザイン　清水貴栄・小林慎太郎
印刷　藤原印刷株式会社

＊禁無断転載

■郵送サービス

『Catwalk／ねこあるき』の郵送をご希望の方は、郵送費用分の切手（１号140円）を下記へお送りいただければ送付いたします。その際、お名前・ご住所・何号をご希望かを必ずご明記ください。

〒390-0815 長野県松本市深志３丁目10番１号
まつもと市民芸術館 広報誌担当 宛

『Catwalk／ねこあるき』は、まつもと市民芸術館のほか、市内公共施設、市内飲食店、全国の劇場施設などに置いております。

■チケット購入・お問い合わせ

[まつもと市民芸術館チケットセンターのご案内]
①電話 0263-33-2200（10：00-18：00）
②インターネット https://www.mpac.jp
(要事前会員登録・無料)
③窓口 芸術館１階（10：00-18：00）

[芸術館チケットクラブのご案内]

※まつもと市民芸術館ホームページよりご登録ください。
※インターネット予約が可能（一部公演をのぞく）。
※メールマガジンにて最新のチケット情報や公演案内を配信。
※ご希望の方には、スケジュールガイド、公演チラシを送付。

■アクセス

【バス】JR松本駅お城口（東口）より、
駅前バスターミナルから「市民芸術館前」下車

【徒歩】JR松本駅お城口（東口）から
「あがたの森通り」を東へ800m、徒歩10分

※駐車場の用意はございません。
　公共交通機関や有料駐車場をご利用ください。
※近隣商業施設等への無断駐車は
　他のお客様のご迷惑になりますのでご遠慮ください。

ここは「つづきの劇場」です。役者たちに 色と セリフが まだ ついていません。

続きを かいて 劇を 完成させてください。完成できたら 金メダルシールを もらえます。

Information

公演情報はぬり絵の後にも掲載しています

SIDE
A
B

チケット発売中

0歳からお年寄りまで、みんなのコンサート
『はじめまして！』

4月21日(日) 13:30
主ホール

出演：石丸幹二、木ノ下裕一、倉田 翠
演奏：クリヤ・マコト（ピアノ）、
塚越慎子（マリンバ）、林周雅（ヴァイオリン）ほか

料金：全席指定（税込）
一般 ¥3,500／U25 ¥2,000／小学生以下 ¥1,000

※2歳以下は膝上鑑賞無料。
※U25チケットは当日年齢確認証提示。

おやこ券 ¥4,000

※前売券及びまつもと市民芸術館チケットセンターのみ取扱。
※おやこ券は、一般：1名＋小学生以下：1名のペア券です。
※予定枚数が終了した時点で販売終了となります。

チケット発売中

まつもと市民芸術館プロデュース
舞台『女40歳 肉屋のムスメ』

5月16日(木) 19:00／17日(金) 14:00／
18日(土) 13:00、18:00／19日(日) 13:00
小ホール

脚本：田村孝裕
演出：福士誠治
出演：小林きな子　星野勇太　下地尚子
荒井正樹　草光純太　長野里美

料金：全席指定（税込）
一般 ¥4,000／U25 ¥2,000

※未就学児入場不可
※U25チケットは枚数限定、前売のみ。
また当日年齢確認証提示。

チケット発売中

パルコ・プロデュース2024
『リア王』

5月2日(木) 13:00
主ホール

作：ウィリアム・シェイクスピア
翻訳：松岡和子
演出：ショーン・ホームズ
美術・衣裳：ポール・ウィルス
出演：段田安則　小池徹平　上白石萌歌
江口のりこ　田畑智子　玉置玲央　入野自由
前原 滉　盛 隆二　平田敦子　／　秋元龍太朗
中上サツキ　王下貴司　岩崎MARK雄大
渡邊絵理　／　高橋克実　浅野和之

料金：全席指定（税込）
S席 ¥11,000／A席 ¥8,000

※未就学児入場不可

チケット発売中

ミュージカル『この世界の片隅に』

7月6日(土) 12:00、17:00、7日(日) 12:00
主ホール

原作：こうの史代『この世界の片隅に』
（ぜノンコミックス／コアミックス）
音楽：アンジェラ・アキ
脚本・演出：上田一豪
出演：
昆 夏美／大原櫻子（Wキャスト）
海宝直人／村井良大（Wキャスト）
平野 綾／桜井玲香（Wキャスト）
小野塚勇人／小林 唯（Wキャスト）
小向なる　音月 桂　ほか

料金：全席指定（税込）
S席 ¥12,000

※未就学児入場不可

В ГОРОДЕ МАЦУМОТО НЕНАДОЛГО ПОДУЛ СВЕЖИЙ ВЕТЕР ИЗ МОСКВЫ

松本に吹いたモスクワからの新しい風

サーシャに取材するためアポイントを取ったら「kaoru kyoko」の名前で返信されてきた。不思議に思いつつ、差出人が彼女だとわかり「アレクサンドラ・サーシャ」に登録し直したので、「kaoru kyoko」のことは忘れていた。

サーシャが松本に来たのは１年半ほど前。現地の音楽学校出身の彼女は、日本語学校に通いながら、さっそく松本の音楽教室の門を叩く。ロシア人であること、日本語がうまく話せないことなどを正直に伝えた。掃除やイベントの準備や手伝いなどするうち、リズムレッスンのアシスタントに起用してもらえたのは「私にはもったいない体験をいただいた」と感謝している。アルバイト先のモスバーガーではやがて接客も任され、緊張と楽しさが入り混じった日々を送っていた。

サーシャを取材しようと思った理由―。彼女は、まつもと市民芸術館の山本卓卓 中高生演劇創作ワークショップ「新しい演劇のつくり方 in まつもと」に応募してきた。もちろん自分が対象枠外なことも理解して。山本と芸術館は、定員の枠が空いていたこともあり、何か素敵な風が吹くかもと参加を了承した。半分くらいの年齢の仲間たちからも「サーシャ」と呼ばれ、打ち解けた雰囲気の中で「脚本」「演出」「役づくり」「演技」について学んでいた。そんな彼女の積極性に惹かれたのだ。

サーシャはモスクワの近隣の街に生まれた。音楽学校でピアノ、卒業後にコーラスを学ぶ中で自問自答するが、プロになる気持ちはなく、進路に悩んだ。その当時を「荒野を歩いているよう」と振り返る。

「何に向かって頑張ればいいかわからずに心落ち込んでいたとき、『少女革命ウテナ・アドゥレセンス黙示録』『ヴァイオレット・エヴァーガーデン』に出会い、その音楽に感動し、もっと聞きたいと思いました。日本語の意味はわからないけれど、素敵な響きに惹かれました。意味はどうでもよかったんです。特別な声が聞こえてきました、“日本に行ってみたら？”最初は驚いたけれど、その声がだんだん大きくなってきたんです。もし自分の人生に悩まなければ、モスクワで頑張っていたと思います」

松本では、素敵な出会いを重ねた。そのエピソードを話すたびに彼女から“感謝”という言葉が聞かれる。

彼女は日本で演劇と音楽、詩を書くことで子どもたちをヘルプしていく仕事がしたいのだそう。

「人生はゲーム、私はゲームのキャラクターみたい。たくさん大変なことがあったけれど、タダン♪タダン♪（ゲーム音？）と乗り越えるうちに、悩んでいた道が少しずつ私の道になってきた」

サーシャはお気に入りの響きだった「kaoru kyoko」の名前を変えようと考えている。サーシャの「サ」から始まる「サユキ」という音が好きになった。「ユキ」にはアレクサンドラの「勇気」という意味が掛け合わされている。そして苗字は大好きな「松本」にする。

左／ロシア時代に日本料理を真似てつくった蕎麦。ナスとトマトのソースがかかっている。右／「新しい演劇のつくり方」の仲間たちと

松本市で活動するアーティストが皆さんのお悩みに、
時にユニーク、時に独特すぎるかもしれませんが、とにかく真剣にお答えします

教えて、アーティストさん

［第三回］ 名和利志子 Nawa Toshiko

お悩み

50代パートで働く女性です。時間とお金のことで長年考え続けています。フルタイムの社員になると収入は確かに安定しますが、ゆっくり料理したり好きな舞台や映画を見に行くための時間的な余裕がなくなります。「時は金なり」と、収入は少なくても自由な時間を持つことも豊かな生き方だと思って今はパートで働いていますが、家族や自分の将来のためにもっと稼ぐべきなのではという思いが常に付きまとっています。仕事にもっと時間を使うこともできるのにそれをやっていない自分は、甘えているのでは、と思えてくるのです。時間とお金について、どのように納得していけばいいでしょうか……。

役者、演技指導。東京キッドブラザースに15年在籍し柴田恭兵のヒロイン等を演じる。その後、松本出身の作演出家・林 邦應と劇団IOHを創立。25年にわたり下北沢を拠点に活動する。現在、東京と松本を往復しつつ、舞台出演とワークショップ講師として若者の才能育成に力を注いでいる。

答え

本当に“時は金なり”だと思う。私は学生の時に社会人になった先輩から、「夏休みの１カ月間、好きな映画を観て過ごせるなんて素敵！」と、目をキラキラして言われた。よっし！　私は映画館に通い詰めるぞと意気込んだが、すぐ挫折した。なぜなら友達がそのころ流行りのアンナミラーズでバイトを始め、毎日が楽し過ぎると目をキラキラして言われたから。バイト代が入ったら一緒に遊ぼうねと言われたが、私のお小遣いは……。毎日、テレビで放映される古い映画と窓の向うの入道雲を眺めていた。なるほど“時は金なり”なのねと思った。でもその時に観た、「鉄道員」「自転車泥棒」「道」は今でも大好きで、お芝居を始めオーディションにいくと、好きな映画は「道」と答えていた。私が40年以上お芝居をやってこれたのは、あの残念な夏休みがあったから。“時は金なり”の金はお金ではないかもしれない。自分の時間を“金メダル”をいただくために使いたい。「美味しいご飯を作ったで賞」「家族を想ったで賞」「楽しく笑ったで賞」たくさんの金メダルがあるのではないだろうか？

私は大根が美味しく感じる年齢になり、先日大根の種を買った。今は「美味しい大根ができたで賞」を狙っている。

「教えて、アーティストさん」では、皆さんのお悩みをお待ちしています。
恋愛や仕事、人生についてなどなどなんでもお寄せください。必ずしも採用されませんが、その時はごめんなさい。
宛先：〒390-0815　松本市深志3-10-1 まつもと市民芸術館「教えて、アーティストさん」係

福祉×芸術館

文化芸術が街を輝かせる

第三回　NPO法人ケ・セラ理事長 西村昭太さん

「文化芸術が街を輝かせる」第３弾はNPO法人ケ・セラ理事長の西村昭太さんにご登場いただきました。NPO法人ケ・セラは、障がいがあっても地域で自立生活できる社会を実現するため、知的障がいの方を中心に構成する楽団ケ・セラを運営しています。同楽団は芸術館や松本市音楽文化ホールでの定期演奏会で900人近いファンを動員し、2013年の信毎選賞、2023年の松本市文化芸術功労賞を受賞するなど、その活動は広く浸透しています。さまざまな挑戦について、西村さんに伺いました。

――まずは、ケ・セラについてご紹介いただけますか。

私どもは就労継続支援B型事業として利用者さんを支援しています。楽団のメンバーは利用者さんで、仕事として音楽活動をやっているのです。就労継続支援A型もB型も、職員は利用者さんの支援をすることで国から事業所に給付金をいただく、利用者さんは働くことで工賃を得るという大前提があります。私どもの場合、演奏会に呼ばれた謝礼、コンサートを主催したチケット収入をみんなで分けて工賃としています。しかしそれだけで工賃を賄うのは難しい。多いときは年間50本のコンサートを行いますが、100本にすれば工賃も倍になります。でも週２本もコンサートを受注するのは簡単ではありません。楽団のメンバーは基本的に日常は音楽の練習をしていますが、農福連携（農業と福祉の連携）、資源物回収、物販などの仕事も手伝ってもらっています。

――こちらでは最初から余暇活動ではなく、仕事として楽団を始められたのですか？

そうなんです。創始者の中西博さんは今は引退されていますが、当初から「音楽で飯を食う」をコンセプトにしていました。中西さんのお子さんがダウン症で、中学までは普通校に通っていたのですが、高等部から養護学校に入ったことで、卒業後どうやって日中活動の場をつくっていくかに悩んだことがきっかけだそうです。ある日、息子さんがいきなりギターを手に「禁じられた遊び」を弾いたのを目撃した中西さんは、その音色に驚いて音楽を生活の中心にすることをひらめいたと。そして2002年に楽団を結成し、４年後に法人格を取得しました。

楽団ケ・セラのコンサートの様子

楽団ケ・セラ第21回定期演奏会　日時：2024年５月18日（土）13：30開演　**会場：**キッセイ文化ホール
料金（完全予約制）：一般1,500円／中学生以下（椅子を必要とする方）500円　**問合せ：**NPO法人ケ・セラ Tel.0263-88-6276

――チャレンジャーですね。

音楽を余暇活動でやっている事業所はよくありますが、器楽演奏を仕事として軌道に乗せているところは珍しいのではないでしょうか。なぜならコンサートを受注するのも難しいし、機材をそろえるのにもお金がかかり大変です。そもそも障がいのある方に音楽のスキルを獲得してもらうのがすごく難しい。私たちの場合は、松本市が楽都であるためか、９割のメンバーが子どものころから楽器をやっています。ですから楽団の楽器編成も経験に合わせた形になっています。レパートリーは100曲ぐらいあって、童謡や演歌からクラシックまで非常に幅広い。そのうちすぐに演奏できるのは30曲ほどでしょうか。

――現代はソーシャル・インクルージョン、インクルーシブなどと言われますが、活動を通して感じられていることはありますか？

上田市のサントミューゼが開場したころ、ケ・セラを呼んでくださったんです。そのときに聴覚障がいの方々にも楽しんでもらえるようなコンサートをと相談され、聞こえない方にも振動で音を感じてもらえるのではと太鼓のコンサートをやったことがあります。定期演奏でも、曲の途中での出入りは一般的には失礼だとされますが、ケ・セラでは自由にしています。私たちのお客様の中には、人工呼吸器をつけた重度心身障がいの方もいて、時折り呼吸器のアラームが鳴るんです。だから親御さんは周囲に迷惑かなと気遣いされるんです。私たちはお客さんのオーダーメイドのコンサートを意識しています。コロナ禍の高齢者施設などは接触ができなくなったので、オンラインを使ったコンサートを始めました。職員が機材を施設に持っていって、プロジェクターと大きなスクリーンを用意して、ケ・セラの事業所での演奏を配信して、メンバーにも高齢者施設の利用者さんの姿が見えるようにしました。同じように家庭に配信してテレビで見ていただいたこともあります。皆さんの条件に合わせてコンサートをカスタマイズすること、ケ・セラの活動を続けていくことがアクセシビリティの向上につながっているのかもしれません。

――すごく実験的な試みをされているんですね。

職員の協力が大きいです。たとえば地域の公民館に呼んでいただくとします。でも寝たきりの方は来られないじゃないですか。そもそも古い公民館はバリアフリーじゃないところも多いし、私のように車椅子では入りにくい。ならば家でも見られますよとしたらいいじゃないですか。そういう意味ではケ・セラの演奏を大勢の人に聴いてもうことは社会とつながり、地域をつくっていることなんだとメンバーを見ていて思います。またいろいろな会場で演奏をさせていただくことで、利用者さんのことを知っていただく機会にもなります。そんなふうに地域づくりに寄与できる楽団であることはとてもうれしいですね。

WELFARE × PERFORMING ARTS CENTRE

元も重要ですよね。

修子　保存は、これから私たちが乗り越えないといけないひと山なんです。実は先代のころ、昭和の半ばぐらいにいっぱい集めた古い押絵雛が入った茶箱が何箱もあって、まだ手がつけられてないんです……。

隆彦　まだまだ復元してないものがたくさんある。

修子　なんならちゃんと見ていない箱もある。

木ノ下　宝の山じゃないですか！

隆彦　押絵雛は昔の内職だったので、誰が何をつくったかが一切伏せられていて、残されていないんです。

修子　箱を開ける時にはご覧いただけますか。

木ノ下　もちろんです！　これはあれだ！とか、こちらは何々だ！とやりたいですね。

修子　ぜひ教えてください。きっと楽しいと思います（笑）。お話ししていて思いついたのですが、木ノ下さんのご存知のところで、象徴的な小道具だけ押絵にして、なにかしたら面白いかもしれないですね。

木ノ下　面白そうですね！

修子　子どもたちに向けたワークショップにして歌舞伎の一場面をつくるとか。

木ノ下　たとえば清姫なら釣鐘と桜、忠信なら鼓、児雷也ならひき蛙など、それぞれのキャラクターとアイコンになっているアイテムを別々につくってかるたみたいに遊んだり。セリフを言いながら動かして芝居のワンシーンを再現したりね。

修子　そういうことができればきっと面白いと思います。押絵雛の新しい使い方。でき上がった後の照明ももっと立体感が出るように舞台の要領で見せられたらと思うんです。昔は行灯の中で飾っていたはずだから。

木ノ下　なるほど。薄暗い中、火の揺らめきがあって陰影もちょっと動いたりする雰囲気ですね。確かに押絵雛は妖艶なイメージもあります。江戸川乱歩の小説「押し絵と旅する男」に描かれたような怪しげな雰囲気も魅力です。

修子　お店の飾るコーナーももっと考えなくちゃ。

木ノ下　高知に絵金と呼ばれた絵師がいたんですよ。お芝居のワンシーン、陰惨なアクションシーンを迫力いっぱいに描いた人ですが、夜ろうそくの灯りで見ることを前提に描いたそうです。だから美術館ののっぺりした照明で見る時と印象が全然違う。

修子　押絵雛も本来そうだったんでしょうね。

木ノ下　当時の人たちがこれをどう楽しんでいたかをもう一回追体験するのもすごく大事ですよね。あと家に一つこういう物があるのはけっこう重要だと思います。僕が子どものころ、家に箒と熊手を持ってるおじいちゃんとおばあちゃんの置物があったんです。なんだろうと思っていたけれど、高校生のときにたまたま観た能で、「あれは『高砂』の尉と姥だったんだ」とわかった。そうすると一気につながるじゃないですか。

修子　そうですね、一つ扉が開きますよね。

木ノ下　そうやって押絵雛も若い子たちにとっての物語とか歴史への扉になってくれたらいいですね。

修子　冥利につきますね。

「これは『道成寺』の鐘を見込む場面（木ノ下参与左手の人形）ですね。前半のハイライトシーン、鐘を力強く見込むところの躍動感がものすごくよく出てる。『義経千本桜』の狐忠信もお顔がちょっと狐っぽいシルエット！　キャラクターの真髄を一瞬の静止画に凝縮してるのが素晴らしいですね」（木ノ下）「生地もいいもの使ってますでしょ。絶対楽しんでつくっているんですよ」（修子）

Text : Daichi Matsunaga　Photo : Takashi Hirabayashi

MEET & TALK with "Matsumoto"

令和6年度から活動を開始する芸術監督団が街に飛び出して市民の皆さんと語る企画です。第3弾は芸術監督団団長で演劇部門を担当する木ノ下裕一参与が、松本市の伝統工芸品「松本押絵雛」を唯一復元、製作・販売している「ベラミ人形店」を訪ね、三村隆彦さん・修子さん夫婦とお話ししました。江戸や明治の芸能や人びとの暮らしを反映してつくられた松本押絵雛、木ノ下参与の眼にどのように映ったのでしょうか。

↑松本押絵雛のモチーフは、昔話や歌舞伎や能の登場人物のほか、七夕、節句の人形、七福神も

木ノ下　僕が初めてまつもと市民芸術館に来たとき、確か七夕シーズンで、劇場の入り口に七夕人形が吊るしてあって。それがずっと気になっていたのですが、聞いていくと「ベラミ人形店」さんのことも知り、やっと今回お店にお邪魔できました。拝見させてもらうと、押絵雛は本当に歌舞伎や古典、歴史のオールスター。歌舞伎の『忠臣蔵』に、「曽我物語」もあれば、加藤清正もいれば、川中島の合戦もある、いろんなキャラクターが詰まっていますね。もう５時間でも６時間でもいくらでも眺めていたいです。

修子　木下さんのワクワクが伝わってきて、私もすごくワクワクしています。

木ノ下　古典好きからしたら夢の空間じゃないですか。これは楽しいですねえ。でも同時に思うのは、たとえばこれを見て「あ、児雷也だ」とすぐわかる層がずいぶん減ってしまっているだろうなぁということ。かつてメジャーだったものがそうじゃなくなっている。

隆彦　そうなんです。でも我々にもわからないものがあるんですよ。

修子　まだまだ勉強不足で。

木ノ下　押絵の題材は時代に応じて変化してきたんですか？

修子　流行り廃りはありますね。

木ノ下　これらは基本受注製造ですか？またはつくったものをお客様が買っていかれるんですか？

修子　どちらもありますが、私どもは古いもののデザインをそのまま復元しているので、マイナーなもの、

木ノ下裕一　Yuichi Kinoshita

木ノ下歌舞伎主宰。小学校３年生のとき、上方落語を聞き衝撃を受けると同時に独学で落語を始め、古典芸能への関心を広げつつ現代の舞台芸術を学ぶ。2006年に古典演目上演の補綴・監修を自らが行う木ノ下歌舞伎を旗揚げ。2016年に『勧進帳』で、平成28年度文化庁芸術祭新人賞を受賞。第28回（令和元年度）京都府文化賞奨励賞受賞。まつもと市民芸術館ではこれまでに木ノ下歌舞伎の作品の上演のほか、「信州・まつもと大歌舞伎」では補綴（台本の再編集）や作品の解説を行う。2023年度は、能や文楽の解説付き公演を実施。

たとえば『児雷也』みたいなリクエストはほとんどないです。

木ノ下　たしかに、『児雷也』が推しキャラです！って方はなかなか稀有だろうし。押絵雛はいつぐらいからあるんですか？

隆彦　押絵雛自体はかなり昔からありますが、松本では江戸時代の文化・文政（1804〜1830）に、武士の奥様方の内職で始まったと言われています。

修子　もともとは武家の女性の嗜みだったそうです。幕末の経済困難で、女性たちもお金をゲットしなきゃいけないと、自分たちの持っている技術でお人形をつくって売っていた。武士は幕末が一番貧乏でしたから。

木ノ下　禄高が決まっていますもんね。

修子　おっしゃる通り。それでお人形を売るって、経済を助けたというような感じじゃないかなと。

木ノ下　すごく面白いですね。もちろん経済的にも大きいけれど、手仕事の技術も習得できるだろうし、コーディネートするセンスも磨かれますよね。さらに小さい子なら、それを覚えながら『浦島』だとか『道成寺』だとか、文化的な勉強にもなる。これ一つつくることによって、武家の女性の皆さんはいろんなことを身につけていたんでしょうね。

隆彦　昔の松本の人の教養の高さが、押絵雛を通してうんと感じられます。

一番神経を研ぎ澄ます、顔を描く瞬間

木ノ下　押絵雛をつくる工程というのはどのくらいあるんですか？

隆彦　まず全体のスケッチをしてから、それに対して分解図を書きます。

木ノ下　首はなくて、襟から足まで？

隆彦　はい、顔だけ除いて。で、型紙に沿ってカットしていきます。昔は型紙は厚紙ではなくて経木で、これだと大型のものはしっかりするんです。その次に中に綿を入れて、布で型紙ごとくるみます。そうしてくるんだものを隣同士貼り合わせます。糊は続飯（そくい）、お米粒を使います。

木ノ下　なるほど、じゃあ針は使わないのですか。

隆彦　糸、針は使いません。

木ノ下　一つひとつのパーツが５ミリぐらいののりしろでくっついてるんですね。とても繊細な作業。

隆彦　松本押絵雛は竹串押絵といって、竹串がついているのが特徴です。大型のものには横にも竹串をつけて反らないようにして完成。台や藁苞（わらずと）に立てて飾ります。

木ノ下　一体つくるのにどのくらいかかるのですか。

隆彦　１カ月から数カ月ぐらいかかるかな。

修子　「手」をつくるだけでも半日はかかります。

木ノ下　本当、手が込んだものなんですね。

修子　お顔は特に。中に入れる綿のゴミ、綿についている黒い殻があって、それを灯りに透かしながらピンセットで取るんですけど、これが大変。全部取ったと思って顔をくるんでも、ゴミが残っていると、ちょうどシミみたいに浮き上がってしまうんです。

木ノ下　何度も何度もチェックして綿のゴミを取る。

修子　そう、布でくるんで何回か顔料を引いたり、にじみ止めのドーサを塗ったり。

↑お店に展示されている当時の押絵雛に木ノ下参与は「芸が細かいなあ」と大興奮
←押絵雛製作の工程より。型紙とワタを布で包んでつくった体のパーツ

木ノ下　綿をくるんでからお顔を描くんですね。苦労してゴミを取って、くるんだもので最後の一発勝負。そこで失敗したら一からやり直し？

隆彦　そうですね。

木ノ下　一番神経使うのはお顔を入れるときですか。

修子　先代は、母がお顔を描くときは一日中、怒らせないようにしていたそうです。

木ノ下　心を乱さないように。

修子　面相筆を持つ手が震えちゃうから、うまくいかないんですよね。

木ノ下　お顔を描く日を「この日に」と決めて何体も描くんですか。

修子　そうです。一点もののご注文のときには2、3個顔のパーツを用意しておいて、できの良いものを選びます。一つだとドキドキしすぎちゃうので。

三村隆彦 / 三村修子　Takahiko Mimura / Shuko Mimura

隆彦さんのご実家であるベラミ人形店にて、ご夫婦で、先代から続く押絵雛の復元に取り組む。出会いは北アルプス・涸沢ヒュッテでの涸沢音楽祭だったという山好きのお二人でもある。

子どもたちにとって、押絵雛が新しい世界の扉を開く機会に

木ノ下　押絵雛は以前はどのご家庭にもあったぐらいメジャーな物だったのでしょうか。

修子　松本辺りではそうだったようです。立体雛の高価さに比べると手に入りやすかったみたいですね。

木ノ下　場所も取りませんしね。現代の住宅環境を考えれば、ひと回りして現代にすごくフィットしそうなお人形ですね。

修子　お人形を飾るときの気持ち、人形にまつわるお話やそれこそ人情なども、なかなか現代では通じにくいところがありますから、それこそをお伝えしたいと思っています。

木ノ下　そこですよね。押絵雛の魅力は単に似せることだけじゃなくて、その背後にあるドラマを抽出しようとしているところ。『忠臣蔵』の大石主税も、わざわざ後ろに大きな木槌を描くことによって、主税は裏門から吉良邸を突破したんだということを感じさせたり、この『娘道成寺』の清姫も目線が上に向いているのは、鐘を見ているから。一瞬のその役の心とか、背景とかがチラッと忍ばせてある感じが、すごく奥行きのあるお人形だなと感じます。

隆彦　ありがとうございます。

修子　ますます顔を描くときに責任重大になっちゃう。

木ノ下　新しく制作することと同じくらい、保存や復

古典や歴史、人び　との営みが凝縮され、
人形として残り続　けている

「The Black Cat Book」
Rhyme : Walter Copeland
Illustration : Charles Robinson

1905年の刊行、今日まで120年近くに亘って親しまれているイギリスの絵本。サイクリングしたり、市場に出かけたり、鼠捕りを学んだり…。影絵のように表現された猫たちは終始無表情で何ともユーモラス、そこに韻を踏んだ軽快な詩が添えられています。チャールズ・ロビンソンは『秘密の花園』(F.H.バーネット)などの挿絵で知られた画家。猫が主役の本書、実は女の子は登場しないのですが、表紙も魅力的です

本とコーヒーとうたた寝を提供する。
〈books 電線の鳥〉原山聡矢さん

「100万回生きたねこ」
佐野洋子 作・絵／講談社

どんなに愛されても、自分本位でその感情に無関心であれば、人生（猫生か？）は無為にすぎていく。相手を想い、愛し、愛される関係を意識することで、無為な時間が意味ある有限な時間に変わっていく。生きるとは何だろうかということに気づかせてくれる本です。この本をうちの店の棚に10年前のオープンした時から飾っています。店に来る多くの人たちを、どんな気持ちで表紙に描かれたこの主人公の猫が眺めているか、時に想像します。

本のあふれた空間で、
お茶やお酒をお供にくつろげる
〈想雲堂〉渡辺宏さん

「どこじゃ？かぶきねこさがし　かぶきがわかるさがしもの絵本」
滝晴己 文　吉田愛 絵　松竹株式会社 協力／講談社

猫には目がなく、歌舞伎はちょっと敷居が高いと考えている方に、楽しい絵本をご紹介。歌舞伎の三大名作を含む五演目のあらすじ、見どころ、登場人物の名せりふを、なんとも言えず美しい歌舞伎の衣装をまとった猫たちが、解説してくれるという趣向。猫づくしで描かれる物語に大人も子どももわくわくすること間違いなし！　それに加えどの作品の終わりも「どこじゃ？」と主人公をたくさんの猫から探して確認するという凝ったしかけ。読み終わるとあなたはもう歌舞伎通。にゃあ

国内外の絵本が並ぶ子どもの文化情報センター
〈ちいさいおうち〉越高玲子さん

「ねこのシジミ」
和田誠 作・絵／ほるぷ出版

猫のシジミ目線で綴られる、文章センスの良さも光る和田誠さんの絵本。銅版画で描かれる線の、なんと柔らかななことか。和田さん一家はあまりに有名ですが、絵本の中でもやっぱり存在感が際立つのは、レミさん。猫の呼び方が本名からどんどん変わっていくのは、猫飼い「あるある」で、お話の中に出てくる事件にもそのエピソードが秀逸に効いてきます。猫だけではなく、家族への愛にも溢れていて、見返しまでも愛おしい一冊。

新しい本 古い本 そして猫がいっぱい
〈本・中川〉中川美里さん

「君を守ろうとする猫の話」
夏川草介 著／小学館

図書館の本が無くなっている…それに気づいたのは本が大好きな少女ナナミ。大切な本を探そうとする彼女の前に現れたのは1匹の言葉を話すトラ猫。ファンタジーな話の流れの中に現代が抱える暗い部分が潜んでおり、その中で希望を灯し続けるナナミの勇気と優しさを通じて本に対する思いに物語が応える冒険活劇。読み終えた後、あなたは次にどんな本を読むのでしょうか…この物語は前作「本を守ろうとする猫の話」の続編となります。あなたの中の「想像力」を携えながら2つの物語にどっぷり浸ってみて下さい。

「図書館よりも図書館らしい」店づくり
〈丸善 松本店〉
吉江いずみさん（写真）&
竹内美帆さん（文章）

ねこあるき、まち歩き、見つけた

ねこのいる本

まつもと市民芸術館では3月23日のチャオ！バンビーニ 2024 冬『ローリーの怪奇骨董お話し箱2024』に合わせて、いくつかの本屋さんにオススメの絵本を紹介していただく企画を実施しました。だったら、本誌でもそんな企画をやってみたい、松本のまちの皆さんと出会いたいと、「ねこ」をキーワードにした素敵な本を、本のある空間を訪ねて紹介していただこうと、あちこち歩き回ってみました。

「退屈をあげる」

坂本千明 著／青土社

猫と暮らすと決めた日から、覚悟しなければならない、いつか来る別れ。思いがけず一緒に暮らすことになった猫（あたし）の日々は穏やかで暖かい「退屈」。そして訪れるあたしの死。きっと空の上でも同じ「退屈」はつづいている。今年19歳を迎える愛猫を撫でながら、こんな優しい「退屈」がつづくなら、と思い、でもそんな日は来ないのでは？と思う。

“本と共にある暮らし”をご提案する
ブック&カフェ形式の書店
〈未来屋書店松本店〉丸山聖絵さん

「このまちのどこかに」

シドニー・スミス 作　せなあいこ 訳／評論社

見えないからこそ「想い」や「存在感」が際立つ「猫の出てこない」猫の絵本。私が子供の頃、うっかり猫を居候させていたことがある。病気のせいか鼻を垂らしたその猫との生活は僅かだったが、抱いた時のか細さと温もりは今でも鮮明に覚えている。突然姿を消して以来、今でも猫は私の中にふと現れる。いや、猫だけでなく、私の前から去った人々を想うとき、いつでもその人は私の中にいるのだ。そんなことを思った一冊。

美味しいパンと一緒に本がある空間
〈サパンジ〉白澤渉さん

「失われた猫」

森博嗣 作　佐久間真人 画／光文社

いつも美について考えている白い猫と、未来について考えている斑（まだら）の猫。縦横に軌道が張り巡らされた街を彷徨する二匹が「失われた猫」をめぐる終わりのない物語を紡ぎます。異国情緒とノスタルジーが同居する緻密なイラスト。作家が猫の姿に仮託して、シンプルかつストレートな言葉で読者に投げ掛ける「問い」の数々。姉妹作に当たる「猫の建築家」（2002年）とあわせ、時々棚から取り出して、眺めたり読み返したりしながら、その世界に没頭したくなる一冊です。

「上高地線」（松本－新島々14.4km）を
舞台に、本を通じた交流を
〈しましま本店実行委員会〉太田岳さん

「猫SF傑作選 猫は宇宙で丸くなる」

シオドア・スタージョン、フリッツ・ライバー他 著
中村融 編／竹書房文庫

猫ほど素敵なエイリアンはいない――気まぐれでなにを考えているかわからず要求だけは一人前。本書は、愛すべき隣人である猫たちが活躍する、翻訳短篇集だ。おすすめは、フリッツ・ライバー「影の船」。〈ウインド・ラッシュ〉という船で暮らす人間・スパーと片言で口汚く罵る猫とが、船の謎に迫る冒険譚だ。前半5篇が〈地上編〉、後半5篇が〈宇宙編〉にわかれ、奇妙でかわいい猫たちの物語を堪能することができる1冊である。

77回もの開催を誇る読書会
〈やつはみ喫茶読書会〉月元健伍さん

「土になる」

坂口恭平 著・装画・口絵／文藝春秋

畑は多種多様な生きものの循環の場だ。坂口恭平がはじめた畑には野良猫『ノラジョーンズ』が住んでいる。坂口は毎日畑に通って野菜の世話をし、猫と関わるうちにその循環に自らが接続されていることに気づく。そして、自身にも大きな変化が起こる――。『ノラジョーンズ』は著者が人間以外の世界と幸福な関係を結ぶための仲介役を務める。いまの日本には野良犬がいなくなってしまったが、野良猫はこの世界に必要な存在だ。

季節の無農薬野菜と本や食材の店
〈のらどこ〉織田倉悠さん

図書館の空間

私は中央図書館ユーザーだ。ここには高校生になってからよく通うようになって、大人も勉強するんだなと知った。老若男女が各々黙々と何かに集中している空間が好きだ。

高校卒業後どこに住んでも、図書館は私にとって居場所であり続けた。大学図書館ではよく寝不足を解消していたし、留学中は大英図書館にも頻繁に通った（イギリスの図書館で寝る人はほとんど居ないので、私の寝る習慣はなくなった）。有名建築として観光した図書館、夜遅くまで開いているカフェのような図書館、仰々しく資料を探しに行った国会図書館など色々あるけど、中央図書館は変わらず好きだ。以前は新聞で包まれた本が並ぶ「ミステリーブック」という企画をやっていたり、最近では小さな多肉植物の鉢を自席に置ける「レンタルプランツ」があったり。関係者の方々のアイデアや工夫が見えて親しみを感じている。小さな植木鉢を本当に手に取るか分からなくても、自分の居心地の良い空間を作っていいよというメッセージだと私は受け取った。

今回は、図書館の南側に咲く「鬼桃桜（ろとうざくら）」を添えたい。桜と呼ぶけれど、実は桃の木。県内の多くの図書館に鬼桃桜が植えられている。（実際は桃なので）一番早く咲く桜、長野県に春を告げる花として知られているそうだ。

Illustration & Text

otama

太田真紀／イラストレーション、ビジュアルストーリーテリング、またそれらを軸としたデザインなどが得意。デザインファーム・Takramでの勤務を経て、2021年4月よりイラストレーターとして独立。松本に住んでいますが、まだまだ知らないことばかりです。otama-ki.com

vol.
03
2024
Spring

［特集］
皆さんは何が好き？
街で見つけた「ねこのいるまち」

ねこまち

まつもと市民・芸術館
Matsumoto Performing Arts Centre